

米欧亜回覧

第46号

発行

特定非営利活動法人

米欧亜回覧の会

編集 総務部会

三月で当会設立満十一年

十二年目の活動が始まる

当会はこの三月で、設立以来十一年を経たこととなる。一九九六年四月、約八十名で発足した時の趣意は、「この会は『岩倉使節団』とその記録『米欧回覧実記』に関心を持つ人の集まりです。これを素材にして歴史を振り返り、現代の問題についても自由に語りあおうという会です」である。その後、会員数も倍増し、二〇〇四年八月にはNPO法人「米欧亜回覧の会」となった。



新年懇親例会

本号では、その十一年間の歩みを示す主要な事業を項目別にまとめてみたのでご覧いただきたい(四頁参照)。

そして、四月からいよいよ十二年目の活動に入る。昨年の秋の大イヴェントである国際シンポジウムの疲れもあつてか、このところ少し停滞気味だった活動も、春を迎えて再び蠢動を始めた。そして新入会員も二十名以上増えているので、新しい風が吹き込まれると期待している。

新年懇親例会は

デンマークをテーマに盛会!

新年懇親例会は、一月十七日(水)、赤坂のシテイクラブ・オブ・トウキョウで開催された。例年とはスタイルを変え、テーブル着席方式で行われた。デンマーク王国駐日大使・フレディ・スヴェイネ夫妻、元駐デンマーク王国日本国大使(現、日本デンマーク協会会長)・荻田吉夫妻の臨席を得

て、華やかに楽しい雰囲気の中で行われた。今、北欧の小さな国々は、いろいろの意味で注目されており、時宜にかなった企画だったと好評であった。

(詳細は二・三頁)

四月の全体例会は

総会とランブーンミーティング

NPO法人としての総会並びに今後の当会の運営方針についての全体会議が、四月二十一日、国際文化会館でおこなわれる。二〇〇六年度の収支報告などの細目は、次号で詳しくお知らせする。

運営方針については先に配布され回収されたアンケートの集計結果や意見を踏まえながら、テーマごとに分かれ全員が発言できる方式のランブーンミーティングを行う予定である。アンケートの集計結果は次号に掲載する予定であるが、自由回答の「本会への注文や期待」の主なものは五頁に抄録してあるので参照してほしい。

事務所を探しています!

当会の事務局は設立以来十一年、イズミ・オフィスにしているが、諸般の事情から都心に移したく、小さなスペースでもよいから(マンションの一室でも)どなたか提供して下さる方はいませんか。条件など委細相談です。耳よりな話があれば、ぜひ事務局までご連絡ください。

最近、「伊藤博文傳」を読み直す機会があった。そこに、いわば若い世代への遺言のような文章があったのでご紹介したい。

博文は、明治四十二年十月、満州のハルピンに旅立つ前、当時海外に留学することになっていた息子の文吉へ酒を汲みながら次のように語ったという。

「人には銘々もって生まれた天分がある。俺はおぬしに何でも俺の志を継げよと無理はいわぬ。もって生まれた天分ならば、たとえおぬしが乞食になったとて、俺は決して悲しまぬ。金持ちになつたとて喜びもせぬ。」

伊藤博文の最後の言葉

泉 三郎

「物事を成すには順序がある。突飛は禁物じゃ。常識の周回な運用が大切じゃ。いやしくも天下に一事一物をなせば、命がけのことは始終あるもので、俺は今まで生きていたのが自分でも不思議と思うくらいじゃ。おぬし、俺の志を継ごうというのなら、この覚悟を以ておれ。依頼心を起こしてはならぬ。他力はいかぬ。自力でやれ。」

裸一貫から身を起こした博文だけに思い切った事をいつている。そして「誠」の大切さを説き、健康に留意するように諭したあと、こういつている。

「学問は、読む学問も必要じゃが、耳学問もまた必要じゃ。人は生きた書物じゃから、西洋に往つたら。あまねく人に接して識見を広め、いかなる人に逢うてもいかなる問題を議論するに、相手となつて話ができるようにするのが肝要

じゃ。社会の時々物々には必ず表と裏のあるものじゃから、広く深く事物の表裏を洞察して宜しきに通ずるがその眼目じゃ。観察の精は西洋人の特色で、粗は東洋人の弱点じゃ」

そして、さらにこう付け加えている。

「満州行ということで、伊藤を送る大磯の駅には大勢の見送り客があつたが、その中には徳富蘇峰もいてなにか不吉な旅立ちを予感したようなことを述べている。結局、これが、博文の日本での最後の言葉となつた。それは、われわれ日本人の子孫への遺言であつたといえるかも知れない。」

新年懇親例会

テーマはデンマーク

駐日大使を招いて格調高く開催!

平成十九年の新年会は一月十七日(水)午後六時三十分より、赤坂のシテイ・クラブ・オブ・トウキョウにおいて「デンマーク」をテーマに開催された。主賓にフレデリック・スヴェイネ・デンマーク王国 駐日大使ご夫妻、荻田吉夫 元駐デンマーク王国・日本国大使(現、日本デンマーク協会会長)ご夫妻をお招きし、出席者は会員四十二名を含む計四十六名であった。



シテイ・クラブ・オブ・トウキョウ

平成十七年の新年会(オーストリーがテーマ)に続く同クラブでの開催となったが、今回は出席者が比較的少数であったこともあり、前回と趣向を変えて、久しぶりに着席

方式の新年会となった。女性会員の方々が、多数、和服にて出席され、フオーマルなテーブルセッティングなどと相俟って、華やかな格調高い会となった。メインテーブルには両大使ご夫妻、泉、藤原、塚本各氏が座り、合計六テーブル、進行は日英両国語で行われた。総合司会は山田哲司氏。会は泉代表の歓迎及び新年の挨拶から始まったが、今年恒例になっている「実記朗読」は都合でとりやめ、代わりに泉氏がスピーチの中で実記のデンマーク訪問の部分について詳しく解説した。まず、使節団がデンマークを訪れたのは一八七三年四月十八日から二十三日までの六日間であったこと、使節団の規模が木戸、大久保らの帰国により小規模となっていたこと(十一名)、さらには国王クリスチャン九世との晩餐会、グレート・ノーザン電信会社主催の晩餐会などについて言及された。会の進行は、この後、藤原宣夫氏の司会により進められ、まずスヴェイネ大使からご挨拶があり、続いて荻田元



スウェーデン駐日デンマーク大使

大使よりご挨拶と乾杯のご発声があつて、以下食事のコースに入った。メニューはシーフードをメインディッシュとした本格的なフランス料理で、皆さん楽しまれた様子であった。デザートコースに入り、スヴェイネ大使が再び立って、十五分ほどのデンマーク紹介のDVDを上映し、ユーモアあふれる解説があつた。中でも印象的であったのはデンマークの特徴を三つのSとして紹介されたことである。それはスモール(Small)、サイレント(Silent)及びスローライフ



デンマーク大使ご夫妻を紹介する藤原会員



荻田元駐デンマーク日本大使

さらにご出席の使節団のご子孫のうち、岩倉規子、大久保利宏、永富邦雄、松前孝廣の方々からご挨拶があり、新年会は盛会のうちにお開きとなった。今回のデンマークをもって、新年会として九カ国を巡ったことになり、残りはオランダ、スウェーデン、ロシアの三カ国となった。(文責) 山田哲司

(Slow-life)の二つで、デンマークは人口も少なく、国は小さいが、静かで平和な国であり、高度な産業国家として、国民はゆったりとした生活を楽しんでいるというものであった。文化的水準の高い、安全にしてゆとりあるスローライフを楽しめる国民は幸せであると感じた。この後、会員を代表し西井正臣氏から別項のような英語によるスピーチがあり、大使ご夫妻も盛んな拍手を送っておられた。



挨拶する使節団メンバーご子孫の各氏(右から) 岩倉規子氏、大久保利宏氏、永富邦雄氏、松前孝廣氏



総合司会 山田哲司氏



コペンハーゲン・海底電信本社 (『実記』第67章)

It is a great honor and pleasure for me to make a short remark on the reasons why we chose Denmark as the theme country of this year for the Iwakura Mission Group.

The Iwakura mission visited ten countries in Europe. Among them, Denmark was the smallest in size and population, and the stay over there was the shortest. Kume, however offered the most favorable comment on the quality of the people of Denmark. I think that this quality orientation of Denmark should be seriously considered in our search for the future direction of Japan at this critical turning point of our history.

When I was very young around 10 years old, I was deeply impressed by the history of Denmark's recovery from the severe defeat of the war with Prussia and Austria in 1864. Uchimura Kanzou wrote a story about the recovery process and the underlining sprit as a protest against the expansion mood prevailing in this country after the Japanese victory in the war against Russia. This story was adopted in the text book of primary school in 1947, when we were completely depressed at the defeat of the world war, and many children at that time, including myself, were greatly encouraged for the reconstruction of the destroyed country by reading this story.

Many leaders in this country, including ministers and top business persons, are still pursuing the economic growth strategy even with the sacrifice of the quality of life of many people. But, I would like to propose to focus our attention and efforts toward the improvement of the quality of life of the people in total. Denmark has been rated as the number one in the world in this regard for more than 20 years. I believe that we have many things to learn from Denmark, small in size but high in quality. I hope this evening useful to deepen the interest and to enhance our knowledge about Denmark. Mange Tak (Thank You)



西井正臣氏

会員代表スピーチ要約



スピーチを終えてデンマーク大使から握手を求められた西井氏



大使自らデンマーク紹介のDVDを解説(中・右)
新年会を終えて大使ご夫妻と記念撮影(左)



国立国会図書館 近代デジタルライブラリー案内

国会図書館は著作権保護期間が満了した12,700冊の図書をインターネットで公開している。その中に、『特命全権大使米欧回覧実記(久米邦武編、博聞社、明治11.10)』の全5冊もあり、各篇の表面から裏面までの全頁が見開きで閲覧できる。手順は以下のとおり。

- ①「近代デジタルライブラリー」で検索してアクセス。
<http://kindai.ndl.go.jp/>
- ②サイト内検索欄に「米欧回覧実記」を入力して検索。
- ③書誌情報画面で、読みたい篇の「本文をみる」をクリックして表示。プリンターで印刷もできる。



(右) 中面例 (第5篇)



(左) 巻末

「日本の進路を探る旅―対米・対アジア問題の原点がここにある!―とする、別冊歴史読本が新人物往来社から四月二十二日発行された。主な内容は、中浜万次郎(ジョン・マン)などの漂流民を先駆者として、一八六〇年「幕府遣米使節団」から一八六七年「佐賀藩派遣使節

団」までの八つの幕末における幕府の海外使節団の解説とメンバーを写真入りで紹介している。そして、幕末の海外留学生の詳しい紹介に続き、十八頁の章立てで「岩倉遣欧米使節団」となる。幕末から岩倉使節団までの派遣団を、人物を中心に網羅したムックとなっている。

書籍案内

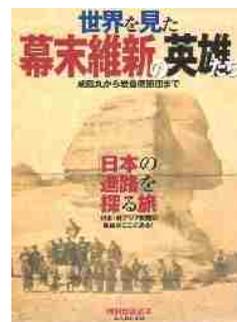
世界を見た

幕末維新の英雄たち

―威臨丸から岩倉使節団まで

別冊歴史読本・新人物往来社

千八百円十税



米欧亜回覧の会・十一年の歩み

本年三月、当会が発足して満十一年を迎えた。百回を超える「実記を読む会」をはじめとする定例の部会活動を下地にして、毎年、多くの事業を計画し、実現してきた。当会の歩みとして、成し遂げてきた事業を振り返る。

■新年懇親例会

- ① フランス(一九九九年) 国際文化会館
 - ② ドイツ(二〇〇〇年) 銀座ライオン
 - ③ イギリス(二〇〇一年) 外国人記者クラブ
 - ④ イタリア(二〇〇二年) イタリア文化会館
 - ⑤ アメリカ(二〇〇三年) 外国人記者クラブ
 - ⑥ スイス(二〇〇四年) 日比谷松本楼
 - ⑦ オーストリア(二〇〇五年) シテイクラブ・オブ・トゥキョウ
 - ⑧ ベルギー(二〇〇六年) 日本プレスセンター、アラスカ
 - ⑨ デンマーク(二〇〇七年) シテイクラブ・オブ・トゥキョウ
- 講師例会
- ◎ 山室英男氏(一九七七年四月) 「岩倉使節団に見る現代の選

扱

- ◎ 水沢周氏(一九七七年七月) 「青木周蔵と岩倉使節団」
- ◎ 中川浩一氏(一九八一年一月) 「世界漫遊家の曙時代―岩倉使節団のころ」
- ◎ 竹内啓一氏(一九八八年五月) 「米欧回覧実記の面白さと難しさ」

- ◎ 中村政則氏(一九八八年七月) 「司馬史観をどうみるか」
- ◎ 中村敦夫氏(一九八八年十月) 「日本の政治をどうする」
- ◎ 芳賀徹氏(一九九九年四月) 「文明論としての米欧回覧実記」
- ◎ 保阪正康氏(一九九九年七月) 「昭和史に学ぶ、大東亜戦争への道」
- ◎ 西川長夫氏(二〇〇〇年四月) 「米欧回覧実記の現代性」
- ◎ 寺島実郎氏(二〇〇〇年七月) 「一九〇〇年への旅」
- ◎ 山崎渾子氏(二〇〇一年七月) 「岩倉使節団はキリスト教をどうみたか」
- ◎ 齊藤純生氏(二〇〇二年四月) 「米欧回覧実記の英訳事業について」
- ◎ 松本健一氏(二〇〇二年七月) 「第三の開国と明治維新」
- ◎ ジョージ・秋田氏(二〇〇二年十一月) 「H・ビックスの昭和天皇に

ついて」

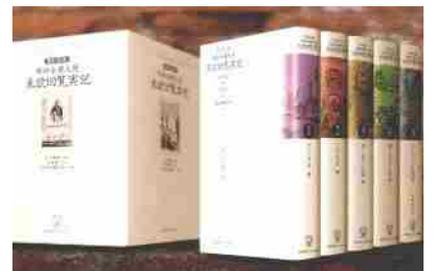
- ◎ 高田誠二氏(二〇〇三年四月) 「科学技術レポーター・久米邦武」
- ◎ 中村政則氏(二〇〇三年七月) 「近代日本・三つの岐路」
- ◎ ドナルド・キーン氏、松本健一氏対談(二〇〇三年十月) 「アメリカン・グローバリゼーションと日本」
- ◎ 水沢周氏(二〇〇四年四月) 「実記精読、訳出の旅」
- ◎ 岡崎久彦氏(二〇〇四年七月) 「現下の国際情勢と日本の外交について」
- ◎ 保阪正康氏(二〇〇四年十月) 「中国から見た昭和という時代」
- ◎ 杉谷昭氏(二〇〇五年四月) 「和魂漢才から和魂洋才へ」
- ◎ 五百旗頭真氏(二〇〇五年七月) 「日本の近代、一五〇年」

- ◎ 橋本五郎氏(二〇〇六年七月) 「ポスト小泉と岩倉使節団」
- 映像の会
- (マラソン(スライド)上映会)
 - ① 九六年六月 日本プレスセンター
 - ② 九七年十二月 白百合女子大学
 - ③ 九八年十二月 日本プレスセンター
 - ④ 九九年十二月 日本プレスセンター
 - ⑤ 二〇〇〇年十二月 日本プレスセンター

⑥ 一一年十一月

- 学術総合センター
- 「国際シンポジウムで上映ビデオ(短縮版)上映会」
- ① 一〇三年十一月 国際文化会館
- ② 一〇四年十二月 国際文化会館
- ③ 一〇五年二月 国際文化会館

- DVD上映会(試写)
- ① 一〇六年四月 国際文化会館
 - ② 一〇六年八月 日本プレスセンター
 - ③ 一〇六年十一月 国際文化会館
- 海外ツアー
- ① ドイツツアー(一〇〇〇年八月〜九月)
 - ② 英国ツアー(一〇〇一年九月)
 - ③ イタリアツアー(二〇〇二年十一月)
- 国内ツアー
- ① 横浜・金沢八景：開港資料館、夏島を訪ねる(一九七七年八月)
 - ② 那須野が原・青木周蔵別荘や松方正義の「万歳閣」を訪ねる(二〇〇一年五月)
 - ③ 大磯：七賢堂と滄浪閣を訪ねる(二〇〇二年六月)
 - ④ 佐倉：蘭学のふるさと順天堂と歴史民族博物館を訪ねる(二〇〇三年五月)
 - ⑤ 関西：京都、二条城、岩倉



現代語訳「米欧回覧実記」
2005年4月 発刊

- 村、大坂城、有馬温泉を訪ねる(二〇〇三年十一月)
 - ⑥ 松前・道南北海道開拓の歴史を訪ねる(二〇〇四年五月)
 - ⑦ 長州下関、萩、山口、光を訪ねる(二〇〇五年四月)
 - ⑧ 薩摩：鹿児島、島津別邸、沈寿官、坊津、知覧を訪ねる(二〇〇六年五月)
- 国際シンポジウム
- ① 五周年記念 「岩倉使節団の再発見と今日的意義」(二〇〇一年十一月)
 - ② 十周年記念 「世界の中の日本の役割を考える」(二〇〇六年十一月)
- 出版
- ① 「岩倉使節団の再発見」 思文閣出版(二〇〇三年三月)
 - ② 現代語訳「米欧回覧実記」 慶應義塾大学出版会(二〇〇五年四月)
- DVD
- ◎ 「岩倉使節団の米欧回覧」 慶應義塾大学出版会(二〇〇六年九月)

グローバル・ジャパン特別研究会
「世界の中の日本人の役割」

西洋的近代化を超える思想を求めて
(サントリー文化財団助成)

表記テーマに基づく「グローバル・ジャパン特別研究会」は、これまで、下記のようなスケジュールで研究を進めてきた。メンバーは登録が現在三十名、出席数はその都度変化があるが、これまで十二〜二十三名で推移している。

第一回(八月二十二日)

芳賀徹

京都造形芸術大学学長

「クローデルの見た日本―魂のうるおい」

第二回(九月十三日)

国分良成 慶応大学教授

「世界の中の中国と日本」

第三回(十月四日)

松本健一 麗澤大学教授

「アジア的発想、共生思想



第7回研究会

(右) 講師の安原氏



について」

第四回(十月十日)

石坂芳男

前トヨタ自動車副社長

(海外担当) 会員

「東と西：グローバル&ローカルの経営」

第五回(十一月二日)

山崎渾輝子

聖心大学教授 会員

「儒教の徒・久米邦武とキリスト教について」

第六回(十二月十三日)

吹田尚一

元三菱総研常務 会員

「日本において近代の超克とはどういう意味か」

第七回(〇七年二月二十日)

安原和雄

前足利工業大学教授、元毎日新聞論説委員

「貪欲から知足へ―仏教経済思想に立って」

第八回(三月二十六日)

泉三郎

ノンフィクション作家 会員

「岩倉使節団が平成日本に問いかけるもの」

今後、第九回、第十回まで続け、その後に総括的なセミナーを行ってまとめにする予定である。

アンケートに寄せられた

会員の本会への注文、意見

先にお願ひしたアンケートの中から、「本会への注文や期待したいこと」として自由に書かれた主な回答を以下に抄録する。

- ・若い世代を増やす、大学教授に学生を勧誘してもらう
- ・幹事の若返りをはかる、団塊の世代をとりこむ
- ・若い世代に歴史を教える努力に同感、協力を惜しまない
- ・土日の昼間のイベントが好ましい
- ・ホームページ、メルマガ、ニュースの充実
- ・中高校の日本史における岩倉関係の露出度を高める方策はないか
- ・中高校の歴史教育への協力、(出張講義など)、他の勉強会とのタイアップ
- ・活動がヴァリエテイにとんでいることが本会の魅力、絶えざる外部への発信も必要
- ・本会は極めてハイブローウの雰囲気あり、大衆路線と二本立てにしてはどうか
- ・多数参加を目指すとするれば、会費は千円程度、連続講座を開いてはどうか
- ・一般市民が気軽に参加できるレベルを考慮すべき
- ・メンバーが多才なので、発言機能をもったほうがよい
- ・「久米追っかけの旅」をしているもの同志で、経験を共有できないか
- ・国際シンポジウムは素晴らしいが、今後もあるような開かれたスタイルを望む
- ・初心者としては「教える、伝える」よりも、「共に学ぶ」、「共に知る」ことに意義を感じ、それを拡大する必要があると思う

現未来部会報告

連絡 塚本 弘

Tel 03-3582-5376 Fax 03-3582-7806

hiroshi.tsukamoto@jetro.go.jp



政治家に聞く

(その一)

有できないか
・国際シンポジウムは素晴らしいが、今後もあるような開かれたスタイルを望む
・初心者としては「教える、伝える」よりも、「共に学ぶ」、「共に知る」ことに意義を感じ、それを拡大する必要があると思う

安部内閣が誕生、小泉内閣時代にすっかり冷えきった中国・韓国との外交関係に息を吹き込み、快調に滑り出したのも束の間、郵政改革造反議員の復党問題や、有力閣僚の失言問題等々支持率が低下、実感の湧かない景気回復状況と相俟って、閉塞感すら漂う昨今である。そこで、改めて日本の針路を探り、活力ある日本を取り戻すためにはどんな方策があるのか、何をどうすべきなのか、思索する政治家に問うてみることにした。

第一回は軸のぶれないと定評のある政治家、藤井裕久元大蔵大臣・元民主党代表代行を招聘して、三月二十八日午後六時半から二時間半、国際文化会館

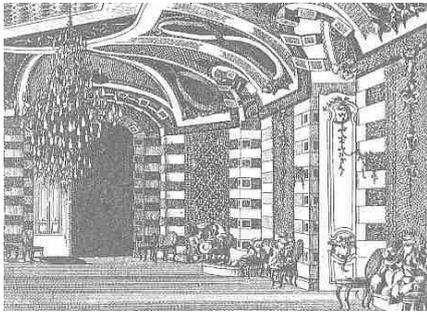


現未来部会
「藤井元大蔵大臣に聞く」

に十八名が参加して話を聞き、活発な質疑応答を行った。
藤井氏の主張は二度と再び不幸な戦争、悲惨なことは繰り返してはならない。現代は嫌な、怖い時代になってきたのではないか、政治的イッシュウとして靖国問題やA級戦犯は問題としては小さい。自分も国のために死んでいった人達を想い靖国には参拝するが、大事なのは、その基礎にある歴史観をどう考えるか、皆が共通して持てることであると、明治以降の内閣時代までを何人かの学者と考察・勉強中であると熱っぽく話をされた。

詳細は仙石由人氏等との共著「日本の近現代史述講 歴史をつくるもの」と、現未来部会議事録(後日作成)をご覧ください。

なお、次回も「政治家に聞く(その二)」の予定である。
(文責) 小田仁彦



ポツダム・ノイエパレス (貝珠宮)
(『実記』第60章)

実記を読む会報告

連絡 桑名 正行

Tel&Fax 03-3642-9570

mkuwana@nifty.com



■第百三回

一月十一日、出席者十二名。第五十七巻、ベルリン市総説を小野氏が報告。人口八十二万人、欧州第四位の大都市、ベルリンの雰囲気：「繁栄進ムニ

従ヒ」次第に墮落して最近特に退廃的になった。飲酒について「英米ノ風ト頓ニ面目ヲ異ニス」とし、「公娼制度のいかん」を問う「治婦」「淫風」「春画」を目撃、この市はまだ二流の都市、と久米は記す。しかし一方、交易面では英・米・仏に決して劣らず、欧州各国の交易自由化と、スエズ運河開通(一八六九)を考慮すれば、ドイツの東洋貿

易隆盛は必至で、わが国も心すべきと、久米は公正に評価する。「富国強兵」の前に、まず「殖産興業」たるべしとの久米の姿勢を指摘。

■第百四回

二月八日、十七名が出席。第六十七巻、デンマーク国の記を桑名氏が報告。

三日前に露国国境を後にした使節団一行は、「錯雑」した国境を越え、バルト海沿いに南下。「三日間二三春ヲ閱」し、快適な汽車旅行で「コペンハーゲン」へ。早速港湾防備事情、砲台等を視察、途次、体格よくて勇猛な近衛兵の教練を見る。さらに、万般の逸品を蔵した王宮を見学。一八六四年、普・奥連合に完敗、シュレスウイヒ・ホルスタイン領を失った。九年後、使節団がそこに見たのは、「ドイツ人を恨み、九世必報の志慨」を持っていた人々だった。

海軍造船所で約二万ドルの巨費を投じ(三年の月日をか)け)作らせた船の模型を見て、船の構造を学び取るには、「ソコマデヤルカ!」と感嘆。

■第百五回

三月八日、出席者十三名。第六十巻、ベルリン市の記、下、付ポツダムを岡部氏が報告。一行は世に名高いベルリン

のモアビット監獄を見学。これまでにもフィラデルフィア監獄、マンチェスター監獄等を見学。いづれも機能的に相似ている。いまや必須の公共施設としての獄舎(刑務所)の観察に鋭い目を注ぐ。

三月二十三日(実は二十四日)天下のベルリン・フンボルト大学を訪問。初代学長フイヒテ、そしてヘーゲル。(これまで二十九年のノーベル賞受賞者を輩出、日本人留学生に森鷗外、北里柴三郎、青木周三、伊藤博文など)。三月二十七日、一行は日帰りでポツダムを見学、「貝珠宮」「オレンジ宮」に続く「サン・サイユ宮(無憂宮)」はベルサイユ宮、シェーンブルグ宮を模したロココ風。造営者フリードリッヒ二世(大王)はこの宮殿で没す。三月二十八日、大久保副使は朝八時フランクフルトに向かい、帰朝の途に。使節団一行(二十七名)は夜十一時三十分ベルリン出発、バルチック沿岸東プロイセンを走り抜け、二十九日午後四時半ドイツ国境最終駅「アイトクアーネン」着(ベルリンからロシア国境まで鉄道約七百七十七キロ)。かつて、ベルリン地区往訪歴のある「岡部レポート」は、ウィキペディアなどを駆使した精密な関連資料とあわせ、まさに圧巻。

■第百六回



ベルリンの地図を説明する
安川氏(4月12日)

四月十一日、出席者十六名。第五十九巻、ベルリン市の記・中、を安川氏が報告。一八七四年二月、一行がベルリンを発ったあと、参謀総長モルトケが常備兵増員を提案した議会で演説を久米は記述している。それは、「現今欧州ノ情実ヲ察スルニ足ルヘキニツキ」ゆえと。ビスマルクの「鉄血演説」(「いまや問題は鉄(武器)と血(兵士)によって解決されるであろう」)は世に有名だが、モルトケのこの演説は、長口舌一番、内容きわめて具体的かつ表現すこぶる露骨であり「遅れて登場したドイツ」の歯ギシリを感じる。安川氏は、本巻の目玉であるこの大演説を朗読された。安川氏の詳細かつ手際の良い「コメント」は、また三頁にわたる「資料・十八世紀末より十九世紀欧州の戦況」はまことに重宝。

(文責) 桑名正行

英訳実記を読む会報告

連絡 岩崎洋三

Tel & Fax 03-3488-0532

iwasakiyozo@kbd.biglobe.ne.jp



月一回、毎回担当を決めてテキストの朗読、英訳で追加された注の和訳、解釈の疑問点、関連情報の紹介などを行っている。

■第百四十四回

十二月二十一日、出席者は七名。第三十章グラスゴー市の記と第三十二章ハイランド旅行記を朗読した。グリーンノックでは造船所、精糖工場を見学、莊園地主の豪邸の訪問記があり、ハイランドの旅になると漢語を駆使した久米の風景描写の筆が冴え渡ってくる。大筋としては原文に忠実、的確に英訳されているが、英語の表現が漢語ともう一つしっくりしない点にもどかしさを感じる。

■第百四十五回

継続は力なりということか、五年目に入った。一月二十五日、出席者は十名。読み残した第三十一章エディンバラ市の記と第三十二章ハイランド旅行記を朗読した。エディンバラ近郊では飾り柱で有名なロスリン寺院を訪問する。またベル・ロックやメイ島の灯台を見学している。灯台建設についての灯台技師口

パート・スチーブンソン一家(文筆家ロバート・ルイス・スチーブンソンはその孫)の貢献やターナーの描いたベル・ロック灯台の絵や灯台の構造について興味深い資料の紹介があった。ハイランドでは漱石も訪れたブレヤール、ダンケルド付近の秋景描写を原文と対比しながら英文を鑑賞した。

■第四十六回

二月二十二日、今回も新規参加者あり、出席は十二名。第三十二章ハイランド旅行記を朗読した。テイ湖、トロサクス周辺の秋景を楽しんだ。久米の見事な風景描写も英語ではピクチャレスクの一言で簡単に片付けられて少々物足りない感じがする。ゲール語で書かれた地名が出て来るが、英国人にも正しい発音は難しいようだ。

■第四十七回

三月二十二日、出席者は十一名。第三十二章ハイランド旅行記、第三十三章ニューカッスル市の記を朗読した。ハイランド旅行ではカトリック湖、ローモンド湖周辺の風景描写を楽しみ、現代の風景写真の構図から久米の時代の観光ポイントと変っていないことが分かる。またグラスゴー市の水道事業に関して英国人と仏国人の法についての考え方の差を論じたり、ニュー

カッスルの毛織物工場の見学を通して、英国では刻苦の現場作業の中から問題を科学的に捉えて製造技術を改良進歩させているが、東洋では才知は同じでも原料資源を供給するだけに甘んじていると論評している。比較文化的考察が見られ面白い。

(文責) 小林 養丈

歴史部会報告

連絡 小野 博正



hiro-ono@hyper.ocn.ne.jp

三月十五日、現役の大学院の特別研究員として活躍の当会会員の小松優香氏に、『石橋湛山の小日本主義』の講演を頂いた。

小松さんは小国主義をテーマにフィンランドの小国主義を研究しているうちに、石橋湛山の小日本主義の思想に行き当たった。そして、現在の日本のインナー・ウオーとも言うべき、道徳・倫理・安心の崩壊や、世界と日本との関係の諸問題を考えるとき、湛山の小日本主義に現状打開のヒントを見た。湛山の思想的バック・ボーンは三人の師に負っている。日蓮宗の僧侶・望月日謙、キリスト教大島正健、そして、プラグマティズム哲学を田中玉堂である。湛山はジャーナリストとし



歴史部会 (正面が講師の小松氏)

て、政治家として、戦前から一貫して大日本主義の幻想を説いて、植民地主義を批判し、貿易立国を唱えている。そして、終戦当日に、早くも『更正日本の再生』前途は実に洋々たり』を発表し国民を励ました。湛山には、合理的精神に基づく慧眼と先見性、一貫した持続力、正義感、総合的価値体系と情報的分析能力、そして何より、思想と行動を一体化したスケールの大きな人間的資質に魅かれる。

世界の問題と日本の問題、国家の問題と地方の問題との間に、常に同一性を見た。安全保障は国連を中心に据えて、連邦共和国による「世界国家」を提案、「日中米ソ」平和同盟を構想し、中ソに接近した。靖国神社廃止論を唱え、日本国憲法の象徴天皇と第九条を賛美し、国民の権利・義務のバランスの悪さを欠点とした。すべてにおい

て、極めて今日的な思考・発想を早くから構想し発信し続けていたのである。当日参加の会員からも、共感と共に、熱い議論を呼び、戦後の歴史の証人としての、会員らの思い出の告白も飛び交い、会は大いに盛り上がり、小松さんの更なる研究への応援の場ともなった。

(文責) 小野 博正



関西支部報告

連絡 難波 康熙

namba@jttk.zaq.ne.jp

■一月例会報告
一月二十三日、十三名が参加。第一巻、アメリカ合衆国の部の第十五巻(編)「北部巡覧の記、下」を読む。

ナイアガラ観光の後、ボストンに向けて移動する。ニューヨークの真北に位置する避暑地の「サラトガ」にも滞在し、温泉以外にさしたる景観もない夏だけの観光地にも拘わらず繁盛している状況を見て、避暑地や観光が一大産業であり得ることを実感する。ニューイングランド地方は、他の広大な土地とは異なり、日本と似た樹木豊かで清河の流れる起伏のある地形に「我日本山水の氣象あり」とほっとしている。ボストンで催された平和大

音楽会に臨場の機会を得たが、大歓迎された要因の一つは、アメリカの有史以来の好景気と経済拡大の時期であったことである。超一流の「歌謡絶倫の婦人」と大合唱団が歌う様子や声の響きについて、白楽天や列氏の詩をも動員したと言われる朗々とした「久米節」に皆酔わされた。

■四月例会報告

四月二十一日、十五名が参加。京都大学名誉教授の岩倉具忠先生をお迎えして、昨年未出版の著書「岩倉具視―『国家』と『家族』」を中心にお話を頂いた。岩倉教授の子供時代には、具視がいかに重々しい存在で、その重圧から反発を感じながら過ごしていたか、具視が海外で品行方正であったのは、出発前に医者に自重するように言われたからに過ぎなかったことなどユーモアを交えて述べ、吐露された。また、具視の娘の寛子(恒子改め)が八十五才のときに会った記憶や、具視は子供たちには英語が必要とイギリス公使のパークス夫人から学ばせるなど家庭面でも進取の気性に富んでいたことなどの逸話も紹介された。

引き続き、実記の輪読会を行なった。(文責) 難波 康熙 (部会・研究会写真) 橋本吉信

特定非営利活動法人
「米欧亜回覧の会」ご案内

- 趣旨** この会は「岩倉使節団」に興味をもち、その記録である「米欧回覧実記」に関心を抱く人々の集まりです。
この大いなる旅と「実記」はまさに「温故知新」の宝庫と言えましょう。
この素材を媒体にして歴史をふりかえり現代の直面する諸問題についても自由に語りあおうという会です。
- 会員** 上の趣旨に賛同する人なら誰でも入会できます。
- 例会** 年に4回くらい全体例会をもちます。
- 部会** テーマ別に読む会、歴史、現未来、総務部会等があり、映像サロン・勉強会・旅行会・研究会・シンポジウムなどを行っています。
- 機関紙** 年に4回程度機関紙を発行し活動報告や会員の意見発表、情報交換の媒体とします。
- 役員** 理事長(泉三郎)他理事および監事で構成、会員の中から幹事十数名を選び、運営を担当します。
- 会費** 年会費5,000円とし、主として通信費及び機関紙代に充当します。例会・部会・講演会などについては、その都度の会費とします。なお、遠隔地居住者、学生、仮入会希望者には準会員(年会費3,000円)の特典もあります。
- 事務局** 「イズミ・オフィス」に置きます。
〒192-0063 八王子市元横山町1-14-16
E-mail:info@iwakura-mission.gr.jp
TEL:0426-46-3310
FAX:0426-45-8700
- 入会申込**
入会申込書は事務局にあります。新規入会に際しては入会金5,000円を頂きます。
なお年会費などのお支払は郵便振込が便利です。
00180-2-580729 特定非営利活動法人米欧亜回覧の会

ホームページ

メッセージ・活動と内容・岩倉使節団・米欧回覧実記・会員のページ等
書籍・DVD案内も掲載

<http://www.iwakura-mission.jp>



<催し案内>

2007年5月～7月の予定です

☆グローバルジャパン特別研究会

【第9回】

日時: 5月15日(火) 18:00~21:00

場所: 国際文化会館

講師: 高坂節三氏

(コンパス・プロバイダーズ日本代表)

テーマ: 西洋近代を超える新しい理念を求めて
—世界の中の日本の環境政策

会費: 1,000円

【第10回】

日時: 6月12日(火) 18:00~21:00

場所: 国際文化会館

講師: 石田寛人氏(金沢学院大学長)

テーマ: 科学技術における日本人の役割(仮)

会費: 1,000円

☆実記を読む会

日時: 5月10日(木) 18:30~21:00

6月14日(木) 18:30~21:00

7月12日(木) 18:30~21:00

場所: 国際文化会館

会費: 1,000円

☆英訳実記を読む会

日時: 5月17日(木) 18:30~21:00

場所: 財)統計研究会会議室

港区新橋1-18-16 日本生命ビル7階

会費: 1,000円

☆歴史部会

日時: 5月21日(月) 18:30~21:00

場所: 国際文化会館

テーマ: 明治のエンジニア教育

講師: 田邊康雄氏

☆関西支部例会

日時: 7月14日(土)

場所: 大阪弥生会館

編集後記

◇当会設立満十年(十一周年)の節目となる昨秋、国際シンポジウムに全力投入したせいか、理事や幹事の皆さんにやや疲れがでたよううで、ニュースの発刊がかなり遅れたことをお詫びします。十一年間を振り返り、新たな当会の活動・運営の方策について、少し時間をかけて全員で考え、話し合いを行なう時期なのかもしれません。
◇恒例となった新年懇親会のテーマは、九方国目となるデンマークでした。デンマークの人口は、わずか五百四十万人、最近何かと話題にのぼる団塊世代(昭和二十二～二十四年生まれ)が、現在六百八十万人もいることを考えると、その小国ぶりが実感できます。国際社会の中で尊敬され、国家としての威信を保つには数の力だけではないことがよく分かります。
◇国会図書館の書籍検索や利用方法が格段に便利になりました。象徴的な例が、『実記』など明治の出版物がインターネットで閲覧できる近代デジタルライブラリー(三頁に案内)です。鮮明でない銅版画がある、画面上の『実記』はさらに読みにくいな

でも原本を閲読できる新しい時代となりました。(N)